

らぼーる上尾(埼玉県上尾市)

重度認知症入居者を映像で見守り



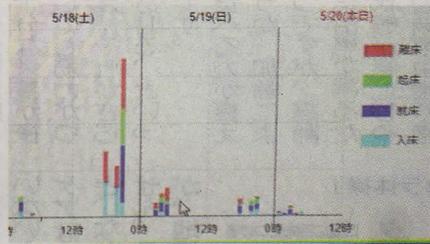
大久保光子社長(左)と青野真也施設長

導入している。3カ月間の効果測定の結果、転倒件数7割減を達成した。

使用対象者は独自ツールで適切に判断

同施設では職員

ラポール(埼玉県上尾市、大久保光子社長)が運営する介護付有料老人ホームらぼーる上尾(青野真也施設長)では、アト普及促進事業を活用。新たに補助対象機器として認められ、半額の負担で導入ができた。対象者は同施設の入居者115人のうち、徘徊



生活リズムの把握は、行動の予測につながる

優先度の判断は映像で

「重度の認知症患者も積極的に受け入れており、安全体制を強化するため導入に踏み切った」と大久保社長は話す。

同製品は、内蔵

の負担軽減や入居者の転倒転落事故防止を目的に10台導入した。そのうち3台は県の「介護ロボット普及促進事業」を活用。新たに補助対象機器として認められ、半額の負担で導入ができた。対象者は同施設の入居者115人のうち、徘徊

や転倒リスクを評価して決定。「長谷川式簡易知能スケール」と独自のアシメントシートを活用した。アシメントシートは、過去のヒヤリハットや、BPPSDの有無などを点数化し、要介護度によらない評価をする。



手すりを組み合わせればベッドの位置に左右されず、設置できる

上で全室確認可能で、同時に複数の利用者を見守ることができる。

同施設では、ペイシェント・ウォッチャー導入前から、マットセンサーを活用していた。ただ、同時にアラートが鳴った時に、優先度の判別がつきにくく、転倒が防げなかったケースもあった。

導入後は利用者の状況を画像で確認することで、優先度の判断が可能になり、効果的に転倒を防げている。

また、解析結果はクラウド上に蓄積され、管理画面で確認可能。「例えば結果を基に排泄のリズムを把握することで、夜の不要な訪室を防ぎ、業務の効率化にもつながっている」と青野施設長は話す。

プライバシー保護のため、カメラ機能はオンとオフの切り替えが可能。「家族が訪問したときには停止し、家族だけの空間を邪魔しないようにしている」と同氏。